京都大学	博士（　文学　）	氏名	永守　伸年
論文題目	カントの批判哲学における構想力の研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、批判期カントにおける構想力の理論をその全体像において示し、それをカントの啓蒙の理論が直面するパラドックスを解決する方策となりうることを論証するものである。以下、本論の要旨を各章ごとに記す。

序論

ここでは、学説史に基づいて論文全体の課題が提示される。まず、18 世紀の哲学者イマヌエル・カントの批判哲学がその啓蒙思想において特徴づけられた上で、この思想に一種の循環の構造が認められてきたことが指摘される。それは啓蒙するのも、啓蒙されるのも理性でなければならないというカントの思想、すなわち自律の思想に由来する「理性の循環」である。他方、本論文は理性そのものではなく、理性と感性を媒介する中間的な能力としての「構想力」に注目する。この能力は M・ハイデガーの先駆的研究以来、つねに『純粋理性批判』の読解において論じられてきたが、それ以降の著作、とりわけ『実践理性批判』をはじめとする実践哲学の領域において検討されることがほとんどなかった。それに対して、本論文は実践哲学、そして美学における構想力の役割に光をあてることで理論哲学と実践哲学のミッシング・リンクとしての構想力の理論を明らかにする。このような検討は、第一に、構想力を批判初期の『純粋理性批判』から批判後期の『道徳形而上学』に至る連続的な理論として示すことを目指す。第二に、批判後期における構想力の理論を実践理性を発展させる能力として解釈することで、この能力をいわば啓蒙の原動力として捉えなおすことを目指す。これら二つの目的によって特徴づけられる本論文の試みは、従来のカント研究においてきわめて手薄であった構想力の思想発展的研究に基づき、カントの啓蒙思想を本来のダイナミズムにおいて提示しようとするものである。

第 1 章　構想力と悟性

本章では構想力と呼ばれる能力がテキストを横断して概観され、その多層的な構造が明らかにされる。そのために、まずは『純粋理性批判』の公刊以前にさかのぼり、カントの構想力の理論がたんなる綜合の作用を超えた広い射程を有するという見通しが示される。具体的には、人間学ならびに形而上学をめぐる 1770 年代の講義ノートが調査され、この能力に含まれている諸作用が二つの系列に分類される。一つは時間軸を通じて与えられる感性的表象を「一つのかたち」あるいは「感性の形式」にもたらす諸作用であり、追・先・現形成能力に認められる。もう一つは美的な完全性を象徴的に形成する諸作用であり、形成完成・構想・対応像能力に認められる。いずれの活動にとっても転換点は 1775 年前

後と推察され、この時期に現形成能力ならびに構想能力のアイデアが導入されたことになる。前者の系列は知覚経験をめぐるヴォルフ学派の経験的心理学から出発しており、後者の系列はバウムガルテンに代表される啓蒙主義美学の影響を受けていると推察される。そして後者に分類される作用、たとえば「象徴」や「創作」をめぐる形成能力の作用は『判断力批判』の構想力の理論において批判哲学の構想に接続される。以上の調査を踏まえた上で、本章では批判期のカント哲学、とりわけ『純粋理性批判』の「三重の綜合」において前者の系列が「綜合」と呼ばれる理論に結実することが示される。この「三重の綜合」に関しては一層構造解釈と二層構造解釈の二つの可能性が挙げられ、後者を擁護することで構想力に固有の働きが明らかにされる。とりわけ「三重の綜合」の「再認の綜合」における概念の二つのタイプを区別することで浮かびあがるのは、構想力は「活動としての概念」に結ばれ、超越論的綜合という基礎的役割を担っていることである。仮にこの役割を悟性の概念化に組み込んでしまうならば、解釈はカントの意図を逸脱して一種の「知覚の知性化」をおかすことになる。本章では、このことが P・F・ストローソンの構想力解釈を批判的に検討することによって論証され、構想力と悟性をめぐる考察が締めくくられる。

第 2 章　構想力と感性

本章では、第 1 章で示された構想力の超越論的綜合が、感性といかなる関係を結ぶのかが問われる。議論の出発点となるのは超越論的綜合が感性的に与えられる対象の質料、すなわち対象の感覚内容だけでなく、感性の形式そのものを産出するという「超越論的演繹」の記述である。従来、この記述の解釈として強い影響を及ぼしてきたのはハイデガーの解釈だが、この解釈に対しては近年は W・ワックスマン、B・ロングネスらの再検討がなされている。このうち、前者はカントの構想力が感性と悟性の「共通の根」であると主張し、感性に対する超越論的構想力の優位を打ち出した。ハイデガーの有名な表現を用いるならば、「空間・時間のアプリオリな表象」とは純粋直観にほかならず、「覚知としての純粋綜合は[…]時間形成的である」。それに対して、後者は超越論的構想力が「形式的なもののいっさいの源泉」であることを認めつつ、構想力に先立って与えられる質料をハイデガーが看過していると主張する。本章では、『純粋理性批判』の第一版演繹の記述に基づき前者の解釈が批判された上で、後者の解釈の内実が第二版演繹の記述から再構成される。ここで注目されるのは、第二版演繹の 26 節における「形式的直観」と「直観形式」の区別である。カントによれば、形式的直観が越論的綜合によってはじめて産出される一方、直観形式は形式的直観とは違っていかなる統一性もなく、ただ「多様を与えるだけ」である。この区別から導かれる構想力と感性の関係は次のようなものになるだろう。すなわち、構想力はその超越論的綜合によって、たしかに感性の形式的次元に関与している。ただし、それはあくまで超越論的統覚との関係において形式的直観を産出するに過ぎず、直観形式そのものはいかなる心的作用からも独立して想定されているのでなければならない。このように、本章では形式的直観を産出する構想力に根源的な自発性を認めながら、

直観形式に受容性の余地を残すことによって、批判哲学における自発性／受容性の二分法が保持されるのである。この解釈ではハイデガーが批判的に検討されているものの、ハイデガーの強調した「共通の根」の理念は本論文第 6 章で再検討される。

第 3 章　自律の構想

本章以降は『第一批判』の綜合の理論を離れ、構想力と実践理性の関係に目を転じる。すでに述べたように、この関係こそ従来のカント研究において看過されてきた論点にほかならない。まず本章では、カントの実践哲学の全体像が(1)理性の公的使用、(2)非社交的社交性、(3)啓蒙のプロジェクトの三点において示される。(1)このうち、理性の公的使用こそ実践理性の目指すべき理念として位置づけられる。そこで意図されているのは理性以外のいかなる「外的な権力」にも服することのない自由、「本来の公衆」に開かれた意見表明の自由である。(2)だが、このような自由を目指す実践理性の発展は人間の非社交性によって阻害される。それは自己愛にもとづく欲求の衝突、すなわち人間同士の敵対関係によってもたらされる不当な欲求として認められる。(3)カントの実践哲学は人間が集団的かつ歴史的な仕方で、このような非社交性を克服し、理性の公的使用という理念に接近することを目指す。それは啓蒙のプロジェクトにおける歴史的な前進運動として特徴付けられるだろう。そして以下、本章ではこの啓蒙のプロジェクトの基本構造が『道徳形而上学の基礎付け』の記述にも見出されることが指摘される。議論の軸となるのは定言命法の理論、とりわけ人間性が絶対的な価値を持つというカントの主張である。この主張の妥当性を明らかにするために、C・コースガードの解釈が批判的に吟味されつつ、定言命法の理論は(i)目的設定の事実、(ii)自由な選択意志の想定、(iii)意志の自律への遡及という三段階の論証を含むものとして再構成される。おおまかに述べるならば、(i)から(ii)の移行には「ほかからの指導を受けるような理性を考えることは不可能」である(したがってわたしの選択意志は自由である)という自己理解が、(ii)から(iii)の移行には「自由な意志はまったく不合理なもの」ではない(したがってわたしの意志は自律的である)という自己理解が働いていると解釈される。ただし、以上の解釈が提示された上で、本章ではこのような論証の構造に序論で述べた「啓蒙の循環」と同型の「自律の循環」が見出されることが主張される。すなわち、(1)一方では、わたしは自分の選択意志を道徳法則にしたがわせることによって、「理念において可能な意志」を実現しようとする。(2)だが他方では、そもそも自分の選択意志を自由に行使し、これを道徳法則にしたがわせるためには、わたしは「理念において可能な意志」によって道徳法則を立法できるのでなければならないのである。このような自律の循環を回避するために、以下、本論文ではカントの歴史哲学に着目する必要性が主張される。

第 4 章　構想力と歴史哲学

本章では、第 3 章において示された循環の構造から脱却するための手がかりが歴史哲学

に求められる。カントにとって実践理性は自律の理念的性格とともに、欲求能力の自然的性格においても捉えられていた。後者の性格は実践理性の自然素質として、その発展の歴史的プロセスが非社交的社交性と呼ばれる人間の傾向性を通じて論じられる。とりわけ『世界市民的見地における普遍史の理念』、『思考の方位を定めるとはいかなることか』、『人間の歴史の憶測的始元』といったテキストではこの歴史的プロセスの初期段階に「理性の下部組織」としての構想力の行使が組みこまれている。まず『世界市民的見地における普遍史の理念』では、第 3 章で否定的に論じられた人間の非社交性が社会をばらばらに引き裂こうとする傾向性でありながら、他方ではまとまりのある社会をつくりあげる原動力にもなることが主張される。すなわち、非社交的社交性が人間の自然素質としての実践理性を発展させ、法的な市民社会をつくりあげる「拍車」としての役割を担うのである。だが、J・シュニーウィンドをはじめ、少なからぬ先行研究はこのような非社交的社交性の主張に社交する人間の感情的側面をめぐる考察が欠落していることを指摘する。そこで、本章では『人間の歴史の憶測的始元』における構想力の理論に光があてられ、構想力が人間の感情を媒介し、社交的伝達を可能にする能力であることが示される。すなわち、人間はたとえその実践理性を十分に発展させていなかったとしても、構想力を行使することによって感官に与えられる対象から反省的な距離をつくりだす。この反省の契機によって、私的な身体的表象に過ぎないはずの感情が公衆に向けて方向付けられる。構想力の媒介によって感情は公的に伝達されうるのである。本章ではこのことが『思考の方位を定めるとはいかなることか』の記述にそくして確認されたのち、感情の社交的伝達の主張が『判断力批判』の趣味の理論において超越論的哲学の構想と接続するとの見通しが示され、締めくくられる。

第 5 章　美感的判断の構造

本章では、美的経験をめぐる『第三批判』の議論の大枠が確認されたのち、この議論が合目的性の概念によって支えていることが指摘される。ただし、この合目的性の内容こそ近年の『第三批判』研究最大の係争点であり、先行研究は(1)認識判断と美感的判断の連続性に注目する立場と、(2)むしろ美感的判断の固有性を強調しようとする立場に分かれている。(1)の解釈によれば、「このバラは美しい」という美感的判断は「バラ」という経験的概念の形成に先行する。構想力の「たんなる反省」とは、バラの表象が「比較・反省・抽象」という論理的操作を通じて経験的概念に仕立て上げられる以前の、認知的に未熟な段階に想定される。他方(2)の解釈によれば、ある美しいバラを目の前にしたとき、判断主体は自分の心の状態を反省する。そのように自己参照的な反省は「同時に」バラを目の前にして主体が意識し、また保持しようとしている主体自身の感情の普遍的妥当性を主張することでもある。本章ではこれら二つの解釈が批判的に検討されたのち、両者を総合する立場として「二層構造解釈」を提示する。それは美感的判断を(i)自由な戯れと(ii)調和の二段階から成立する判断とみなす解釈であり、(i)では構想力によって反省される美的対象の表

象の客観的側面に、そして(ii)ではこの反省を通じて到達される判断主体の心の主観的側面に議論が移行するとみなす。この解釈にしたがった上で、本章では美的経験における「構想力の自由」というカントのテーゼが(i)の段階に位置付けられて考察され、美感的判断において構想力はいかなる概念にも規定されることなく、美的対象の表象を自由に覚知することが明らかにされる。ただし、最後に、このような自由において構想力はけっしてアナーキーに行使されているのではなく、純粋な美の産出に対する「理性の関心」によって制約されていることが示される。理性の関心は構想力を駆動させ、美感的判断の発生因となるのである。

第 6 章　構想力と感情

本章では「二層構造解釈」にもとづき、感情の普遍的伝達可能性が検討される。まず『第三批判』では感情の伝達のために共通感覚と呼ばれる心の働きが想定されていることが確認されたのち、この働きの理念的な性格が指摘される。では、理念としての共通感覚はいかにして獲得されるのだろうか。この問いを解決するために、本章では美的主体の「生命の原理」に注目し、身体をそなえた生命的主体の類縁性によって感情の普遍的伝達が、すなわち共通感覚の獲得がなされることを主張する。まず生命の概念について、カントは『視霊者の夢』以来これを一貫して心の内的な自発性にもとづけており、それは『実践理性批判』、『自然科学の形而上学的原理』といった批判期の著作においても変わらない。具体的には、生命はほかならぬ人間の生命として人間の選択意志の行使にそくして論じられてきた。それに対して『判断力批判』は人間の生命の発揮を「生命感情」と呼ばれるビビッドな感情の喚起に見出そうとする。なるほど暴力の恐怖、性の魅力のように、人間の感情は外的な対象にただ受動的に反応しているようにも思われる。だが『第三批判』によれば、美的経験において感情は内的な自発性に対する応答の役割を果たす。判断主体は美的対象に働きかける自分の心の自発性、そして自発性における理性の権威を生命感情の喚起という身体的な経験を通じて気がつく。この気づきはまた、その判断主体と同じように心と身体を兼ねそなえた他人にも共通に感覚されうるのである。以上の議論がなされたのち、本章では、このような共通感覚の理念が実現されるための具体的な啓蒙のプロジェクトのありようとして、社交における経験的な伝達も言及される。人間はたとえ理性を十分に啓蒙しておらず、それゆえ理性を公的に使用することができなかったとしても、構想力を通じて感情を伝達することができる。それは段階的に「考え方の拡張」を進めてゆくということ、あるいは「公衆」に向けて自分の私的な身体のありよう、感情の内容を方向づけてゆくということにほかならない。ここに至って、本論文は構想力と感情という「理性の下部組織」に啓蒙のプロジェクトの原動力を見定める。このような原動力は、理性による理性の啓蒙という従来のスタティックな啓蒙の循環にかわって、カントの批判哲学に本来のダイナミズムを与えるのである。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、批判期カントの啓蒙哲学が直面するパラドックスを「構想力」概念の徹底した分析により解決することを目指したものである。理性と感性を媒介する中間的能力としての構想力に関しては、従来多くの研究が蓄積されているとはいうものの、そのほとんどが『純粋理性批判』における綜合の理論との関係で論じるか、あるいは『判断力批判』における美的判断の生成に関わるものとして論じられてきたにすぎず、『実践理性批判』や『道徳形而上学の基礎づけ』などの実践哲学的著作を含めてカント批判哲学に通底する問題として総合的に研究されたことはこれまで希であった。本論文は啓蒙のパラドックスという独特な問題意識のもとに、カント批判哲学全体における構想力の役割を問い直すものであり、その問いの深さと射程の広さには驚嘆すべきものがある。本論文では所謂三批判書や『基礎づけ』のみならず前批判期の著作や批判期における小論を含めたカントの著作を縦横無尽に精査することを通じて、新しいカント解釈を一貫した形で示すことに成功しており、その独創性は卓抜なものである。しかも、その解釈は手前勝手で我田引水的なものではなく、テクストの的確な引用と、ほとんど網羅的ともいえる大量の二次文献の批判的検討を踏まえた堅実なものとなっており、高く評価しうる。

三部六章構成になる本論の第一部では、主として前批判期の諸論考と『純粋理性批判』における構想力概念の成立が精査される。とりわけ「三重の綜合」とよばれる難解でつとに論争のテーマとなってきた「超越論的演繹」におけるカントの議論が、たんなる綜合の理論を超えた広い射程をもつものであり、そこには構想力の多層的、多元的なはたらきが深く関わっているという指摘は貴重なものである。また、第一部の末尾では、直観形式の受容性に関する卓抜な考察は、第二部、第三部での考察を予告するものともなっており、本論文全体の有機的一貫性を示しているといえる。

第二部においては、実践哲学的著作における実践理性と構想力の関係についてが論じられるが、ここでの考察は、実践哲学におけるカント自身の構想力への言及が少ないこともあって従来のカント研究においてほとんど欠落していた論点であり、いわばカント研究におけるミッシングリンクを再構成したものとして画期的なものであると評価できる。特に、通常あまり顧みられることのない批判期の小論群を独自の視点から読み解き、理性の公的使用、非社交的社交性といった概念を、構想力概念を導きの糸として、カント批判哲学に通底する啓蒙のプロジェクト、とりわけそれが直面せざるをえないパラドックスとの関連で論じる手法は、ともすれば定言命法に代表される非時間的、静態的なものとみなされがちなカントの道徳形而上学の読解にあたって、時間軸における理性のダイナミズムを生き生きと描き出しており、これまでになかった新しいカント像を見事なまでに構築することに成功している。また、第二部末尾では、歴史哲学的に示唆されるにとどまる社交における感情の伝達に関する問題系が、超越論哲学の水準にまで

高められたものとして『判断力批判』における構想力の自由な戯れと感情の普遍的伝達に関する理論へと接続されうるという指摘がなされており、本論の力強い一貫性を示すものとなっている。

第三部においては、第二部末の予告に基づき、まず『判断力批判』における目的なき合目的性という、これまで論争の的になってきた問題が取り上げられ、認識判断と美感的判断の関係に関する従来の二種の見解（両者の連続性の強調の立場と美感的判断の固有性を強調する立場）のそれぞれが批判的に検討された後、これらを統合する近年のアリソンやロングネスといった論者によって唱えられた美感的判断の二層構造に関する学説を継承発展させる形で独自の解釈を提唱する。それは、こうした問題群を、すでに第一部において論じられたカント理論哲学における構想力の多元的はたらき、とりわけ構想力の自由という点と結びつけ、そこからの理論的進展として『判断力批判』を捉えるという画期的なものとなっている。最終章においては、こうした解釈に基づき、感情の普遍的伝達可能性と構想力という最終的な問題が、「共通感覚」概念との関係において論じられる。この概念は哲学史的にみても問題の多い概念であるが、本論では、これを出来合いの能力としてではなく、社交を通じて産出、形成されていくものであるという解釈を、『判断力批判』以外にも前批判期の『視霊者の夢』などの著作を援用しつつ提出する。これは第二部で提示されたカント実践哲学の時間軸におけるダイナミズムという見解とも即応するものであり、本論の独創性をあますところなく証示するものである。その上で、構想力に関する批判期カントの理論的発展は、「中間的存在」としての人間における「中間的能力」である構想力が啓蒙のダイナミックなプロセスにおける推進力であることを明確にしていくものであったという結論が導かれ、さらに、このような解釈が啓蒙のパラドックスと呼ばれる問題へのひとつの有力な解法であることが明確に示される。

以上、本論はカント批判期の著作を縦横かつ徹底的に読み抜き、多くの従来の解釈上の論争点に関して独自の見解を提出しつつ、包括的かつ独創的なカント解釈を提出しえたという点において画期的な研究であると評価できる。本論はカントの構想力理論の発展史の研究としてだけでも有意義なものであり、今後のカント研究に与えるであろう影響は大きいと予測されるが、それ以上に、そうした記述を通して、理性、あるいはその協働者としての構想力を、その時間軸におけるダイナミックな働きとして社交の理論との関連で捉えるという斬新な方向性は、カント研究という枠を離れても、哲学、倫理学の現代的な議論に対して大きく貢献しうる可能性をもっているといえるだろう。

しかし本論にも指摘しておかねばならない瑕疵は残る。『純粋理性批判』や『判断力批判』等の批判的著作と『人間学』や他の小論群では、読者対象が異なるということもあって、その記述方法や議論の確実さにおいて相当の質的差異を認めうる。本論では、そのことに十分自覚的に後者の諸論考が援用されているのだが、両者を理論的に結びつけるにはいま少しの論証が必要になろう。また、学位論文ということもあってカント内在

的な議論に禁欲していることは理解できるとしても、ヒュームやスミスなどのカント以前の倫理学、それになによりカント以降のカント批判を含めた理論的展開への参照がさらに求められるかもしれない。しかしこれらは、論者の今後の精進によって必ずや補われるはずのものであり、直ちに本論文の画期的な意義を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十七年四月九日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。